

学位授与番号	甲第 1673 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 22 日
氏 名	高 井 澄 枝
学位論文題目	Incidence and bacteriology of bacteremia associated with various oral and maxillofacial surgical procedures (口腔外科手術による菌血症の発生率および細菌学的検討)
論文審査委員	主 査 教 授 山 本 悦 秀 副 査 教 授 清 水 徹 教 授 古 川 仨

内容の要旨及び審査の結果の要旨

菌血症とは血流中に種々の細菌が存在する状態をいい、歯科口腔外科領域では抜歯後菌血症として古くから報告されてきた。本症は一般的には一過性とされているが、全身疾患を有する易感染性宿主では感染性心内膜炎など重篤な合併症を継発することがあるため、米国心臓協会等により抗菌薬予防投与ガイドラインの提唱がなされてきた。一方、抜歯以外の口腔外科処置と本症の関連については報告は殆どなされていない。そこで本研究では各種口腔外科手術を対象として、発症頻度や発症と関連する因子等についての検討を行った。材料および方法：対象は当科で手術を受けた患者のうち、事前に研究内容の説明を行い、同意が得られた 237 名である。静脈血の採取は各手術の終了時点とし、得られた血液を液体培地に接種し、好気および嫌気環境下で 7 日間、さらにその残渣を寒天培地で 7 日間培養した。細菌の同定は通法に従い行った。得られた結果は以下のように要約される。

1) 菌血症は全 237 例中 70 例 29.5 %に検出された。これを手術内容との関連から検討すると、顎骨骨髄炎に対する皮質骨切除で 7/12 (58.3%)、抜歯で 33/57 (57.9%)と群を抜いて上位 1, 2 位を占め、以下、顎矯正手術 10/33 (30.3%)、顎骨骨折手術 3/23 (23.1%)、上顎洞根本術 4/18 (22.2%)と続いていた。逆に発生頻度の低い手術は、プレート除去術 1/12 (8.3%)、顎関節手術 0/10 (0%)等であった。

2) 菌血症 70 例から分離された全菌種数は 120 で 1 例平均 1.7 であった。これら分離された菌種を高頻度順に見ると、Viridans streptococci 36 例、嫌気性菌の *Actinomyces*、*Prevotella* および *Veillonella* が各々 18、13、10 例と続いたが、これらの菌種と手術内容との間には関連性は認められなかった。

3) 次に菌血症発生と関連する各種因子を検索したところ、口腔清掃の程度、残存歯数、手術時出血量等と関連はなく、手術時間で抜歯症例が多く含まれた 30 分未満に 15/31 (48.4%)と高頻度に観察され、30 分以上の 55/206 (26.7%)との間に有意差が認められた。そこで、さらに抜歯例に限定して関連性を検討したところ、抜歯本数、抜歯の難易度等とは関係なく、当該歯に歯周病などの歯性炎症がある場合が 30/44 (68.2%)と、ない場合の 3/13 (23.1%)に比して有意に高い値を示していた。

以上の結果より、菌血症は抜歯に関連して発症しやすく、中でも歯性炎症を有する歯で顕著であったのに対し、歯と関連のない口腔内手術や口腔外の手術では発症頻度は低かった。

以上、本研究は各種口腔外科手術と関連する菌血症の発症頻度および発症と関連する因子を明らかにしたものであり、口腔外科学および臨床口腔細菌学に寄与する価値ある労作と評価された。